

琉球の方言 3巻 : 宮古大神島

法政大学沖縄文化研究所

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

176

(発行年 / Year)

1977-12-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012775>

I 音 韻

1. 大神方言の音素

大神方言には、これまで調査した資料によると、次のような音素が認められる。

子音音素 / ʔ, p, t, k, ɸ, m, n,
f, v, s, r /

半母音音素 / j, w /

母音音素 / i, i̥, e, a, u /

モーラ音素 / M, N, ɰ, Q /

1.1 母音について

大神 (ukam) 方言の母音は、音韻的には / i, i̥, e, a, u / の体系をもつ。図示すると次のようになり、特異な体系を示す。

i	i̥	u
e	a	

音声的諸特徴について示すと、まず、中舌母音 / i̥ / の場合、音声的にはむしろ [ü] のように観察される母音であり、他の宮古島方言に見られる中舌母音 [i̥] (たとへば、平良方言など) に比して、かなり後寄りに調音されているようである。

音色といい、話者が強調して発音する際に上歯と下歯をぐっと噛みしめて、唇を平らに横へ強く引き、舌根の緊張を伴って調音される調音法といい、中舌母音 / i̥ / がかなり後寄りに調音されていることを示すものである。

また、母音 / a / が中舌母音 / i̥ / に後続する際、/ i̥ / から / a / への出わたりにおいて、たとへば [ü̥ a] (父) のように、軽い有声の軟口蓋摩擦音 [ʃ] を伴って調音されることなどは、/ i̥ / の調音点がかなり後寄りの [ü̥] (但し本稿では便宜上、以下に [i̥] と表記する) であることを示すものと思う。

次に奥舌母音 / u / について観察すると、こ

れはやや唇をすばめて、前へつき出す口構えで調音されていることに気づく。その口構えで、[o] を発音する気持ちで調音される音声のようである。インフォーマントの内省報告によれば、「ウとオを重ねたもの」、「ウとオの合いの子」だという。[ɰ] で表記されるべきものであろうが、本稿では便宜上、スモールキャピタル [U] で表記する。これが / u / の一つの異音である。

いま一つの異音は、いわめる [u] である。この方言の場合、/ u / の異音として [U] と [u] を認めるわけであるが、これらは、中舌母音 / i̥ / がかなり後寄りの調音点をもつために、本来の奥舌母音 / u / が、調音力学上、下方へおしやられたものと解されよう。その分だけ、音声的には「口のすばまり」という外形的特徴^(注1)となってあらわれているものと考えられる。

その他、母音 / e / は音声的には、やや広い [ɛ(:)] のように調音されている。

(注1) 中本正智著「琉球方言音韻の研究」

1.1.1 前舌狭母音音素 / i /

大神方言の場合、語頭において、母音の前に [ʔ] を伴うのは少い。かりにあったとしても、ごく軽い声門破裂音 [ʔ] であるから、特に表記する必要もないようである。

勿論、示差的特徴ではない。従って、この方言における狭母音は調音点の位置によって次のように対立を示していると言える。

例 / ʔi 'i / [i:] (柄)
/ 'i̥ 'i̥ / [i̥:] (要る)
/ 'u 'u / [u:] (「はい」返答)

／'i s i / [i s i] (石)
 ／'u s i / [u s i] (牛)
 ／'u s i / [u f i] (押しなさい)

1.1.2 中舌狭母音音素 / i /

この方言に現われる中舌母音の音声の特徴については、1.1の「母音について」の項において述べた。音声学的にはかなり後寄りに調音される [ü] であることは、すでにみた通りである。

これが無声子音 [p, k] と結びつくとき、無声の摩擦的噪音 [s] が起きて、それが起きないものと、それぞれ音韻的に対立することがある。たとえば次の通り

例 /paki/ [paki~pa^gi] (はげ, 禿げた)
 ／pak i / [paki~pa^gi] (脱ぐ, はぐ)
 ／paki / [pak^si] (吐く)

これらに関して、1.2においても、更に述べることにする。

1.1.3 前舌半広母音音素 / e /

／e／が短か母音として現われることは、この方言においては少ない。音声的にはやや広い [ɛ(:)] となって現われることが多い。

例 /makisja / [mak^siʃa] (町)
 ／makise / [mak^siʃɛ] (店)
 ／ma'uke'e / [maukɛ:] (前)
 ／sike'esim / [sikɛ:sim] (走る)

1.1.4 奥舌狭母音音素 / u /

音声的には [U] と [u] が認められる。これについても、すでに1.1で述べた。[U] と [u] は意味の弁別機能を持たず、音韻的には、従って、／u／と解される。

例 /'ukiru / [ʊkiru] (受けなさい)
 ／'ukiru / [ʊkiru] (起きる)
 ／'uti'i'i / [uti:i] (落ちる)
 ／'utu / [ʊtu] (音)

1.1.5 中舌広母音 / a /

広母音 [a] は他の宮古島方言の母音に比して特に変わった音声の特徴を示すことはない。

[a] は他の母音と次のように対立する。

例 /'a'a / [a:] (粟)
 ／'i'i / [i:] (柄)
 ／'u'u / [u:] (「はい」返答)

1.2 子音について

大神方言の大きな特徴の一つとして、従来指摘されてきたことは「破裂の有声音 (b, d, g) がまったくない」ということである (「全国方言資料」第11巻 琉球編Ⅱ参照)。

ところで、先に、1.1.2の項でもふれておいたが、中舌母音 / i / が無声の破裂音と結びつくとき、無声の摩擦的噪音 [s] を伴うことにより、それを伴わないものに対して音韻的に対立を示すことが認められた。

これについては崎山理氏が「国語学」54誌上ですでに一つの解釈を示された。それによると、「… / c i /, / c i / と解すべく～」とあるから、大神方言には / i / [s i] と、 / i / [i] の二つの中舌母音が存することになる。

興味ある一説ではあるが、次に述べる理由により、ここではとらず、別の側面からの解釈を試みることにする。

まず、崎山説に従えば、大神方言の母音の体系は次のようになり、解釈上、無理が生じる。つまり、大神方言の母音体系は、狭母音におい

て、4つの音素対立を認めなければならず、体系上、著しく不均衡である。

i	ʔ	ĩ	u
e		a	
前舌	中古	後舌	

また、大神方言以外の他の宮古方言で一般的に観察される $o^a i$ 、 $o^z i$ （ただし o は子音）においては、 $[-s]$ 、 $[-z]$ は直前の o により条件づけられていることもわかっている。

つまり、 o が無声音か、有声音かによって、 $[-s]$ か、あるいは $[-z]$ が現われるのであるが、この事実は、大神方言の音韻的解釈の際にもきわめて重要な意味をもつことが、これから示す諸例によって理解されると思う（これについては、すでに平山博士が「国語学56」誌上で発言され、中本正智氏も「琉球方言音韻の研究」で発言しておられる）。

例 $[s a k i]$ （手拭）……………(1)

$[s a k^a i]$ （先、先端）……………(2)

上例によれば、(1)と(2)は音韻的に対立を示すものであり、しかもそれは、 $[-s]$ という feature があるか、ないかの一点に求められている。つまり、 $[-s]$ は示差的特徴であるということになる。

そして、すくなくとも、上例を一見したかぎりでは、上に示した対立は「母音の差による対立である」かのような錯覚におちいりやすい。

しかしながら、実は、そうではなくて、大神方言にも、後で示すように、「直前の子音」が条件づけとしての機能を果たしていることがわかるのである。

大神方言の場合、有聲の破裂音 (b , d , g) は、実は $[p]$, $[t]$, $k \sim b$, d , g] のように現われる。両唇、あるいは歯茎、軟口蓋という、

同一調音点において、有聲か無聲かという示差的特徴が失われつつあり、ほとんど全く $[p]$ かあるいはそれに近い $[b]$ であり、 d , g においても同様、 $[t \sim d]$, $[k \sim g]$ なのである。

ということはどういうことになるのか。音声学的に少し注意してみれば問題は氷解する。

／ $o i$ ／において、大神方言の場合、 o が同じ無声子音でありながら $[-s]$ の現われるものと現われないものが認められた。もし、これだけを他の宮古方言のデータと比較すれば、大神方言に現われる現象は正に例外的なものとなるであろう。

問題はそこにあるのである。先にも見た通り、大神方言の特徴は、破裂音において、無聲か有聲かという feature は、その機能を失いつつあるということであった。ということは、他の宮古方言の破裂音と大神方言の破裂音を等し並みに考えてはならないということである。

大神方言の破裂音の中には、無声音であるにもかかわらず、その出自を有声音に求められるべきものも混在している。

従って、それらの音声が中舌母音と結びつくとき、有聲か無聲かの feature を失いつつあるだけに、それは、他の宮古方言にみられるような、有聲の摩擦的噪音 $[-z]$ を積極的に生成する能力を持たないのである。

このように、大神方言の無聲破裂音の中には、消極的に、しかしながら有意味的に、己の出自（有声音子音であること）を語ることしか出来ないものもあるわけで、それらが結局／ $o i$ ／において $[-z]$ を示さないということなのである。

だから、大神方言の／ $o i$ ／において、全く同じ音声環境で、 $[-s]$ を伴うものがあり

ながら, [-z] を伴うものが現われないう理由で, その対立を母音の差によるものとし, / ɪ / と / i / に解するとすれば, それは誤解を生むであろう。

大神方言の場合 / ɔ i / において, [-s] が現われることは, 直前の子音が本来的に無声子音であることを顕在的に示す標識であり, 何も現われないうことは従って negative に, 直前の子音が潜在的に有声子音であることの標識と解すべきである。それは [b, d, g] という音声の实在によっても知ることができる。

例 [m k i] (右) ……………(3)

[m k i] (道) ……………(4)

1.2.1 両唇無声破裂音素 / p /

この方言の音素 / p / は音声的には [p ~ b] のように実現される。この関係は, いわば自由変異と認めてよい。これについても, すでにふれた。[b] はさらに無声化がすすんで, もはや有声と無声の対立を示さないまでに統合してしまい, 大神方言の大きな特徴の一つを形成するに至っていると見ることができる。

例 / pa' a / [pa:] (葉)

/ pa' u / [paʊ ~ baʊ] (棒)

/ paka' im / [paka'im ~ baka'im] (奪う)

/ paka' im / [paka'im] (計る)

/ pi' i / [pi:] (屁)

/ pi' i / [pi: ~ bi:] (酔う)

/ pim / [pim ~ bim] (坐る)

/ pu' u / [pu:] (帆)

/ pu' u / [pu: ~ bu:] (紐)

/ pe' i / [pei] (行く)

/ pe i / [pei] (針)

1.2.2 歯茎無声破裂音素 / t /

音素 / t / も / p / と同様, 音声的に [t ~ d] のように実現される。つまり, [t] と [d] は自由変異であると認められるということである。

例 / ta' a / [ta:] (田)

/ ta' i / [tai ~ dai] (机)

/ ta' iki / [taiki] (大変, 危い)

/ tu' u / [tu: ~ du:] (自分, 己)

/ tuku / [tuku ~ duku] (毒)

/ tusi / [tusi ~ dusi] (友人)

/ tusi / [tusi] (年令, 年)

1.2.3 軟口蓋破裂音素 / k, ɰ /

この方言は, 一般的に言って, 有声と無声の対立が失われている方言であった。これは先に見てきた通りである。

しかし, これまでの資料によると, 軟口蓋破裂音の [k] が中舌母音と結びつくときに限り, 有声と無声の対立が認められる。

例 / ki' i / [ki: ~ gi:] (地面, 字)

/ ki' i / [kɰ:] (ちち (乳))

/ paɰi / [pakɰi ~ paɰi] (脚)

/ pakɰi / [pakɰi] (吐く)

/ saɰi / [sakɰi ~ sagɰi] (手)

/ sakɰi / [sakɰi] (先, とがった先)

1.2.4 鼻音素 / m, n /

この方言の鼻音は調音点が両唇か歯茎かにより意味の区別をする。呼気をいったん歯茎で閉鎖し, 破裂と同時に鼻むろへ呼気を流して得られる音声で, これを / n / とすれば, / m / は, 両唇において破裂が行なわれる通鼻音である。

例 / ma' i / [mai] (米, 稲)

/ na' i / [nai] (実, 果実)

/ma'i/[mai] (～も～)

/na'i/[nai] (～なる(成る))

/makim/[mak^sim] (蒔く, 巻く)

/nakim/[nak^sim] (泣く)

/mi'i/[mi:] (目)

/ni'i/[ni:] (根)

/mak'i/[mak^si] (松)

/nak'i/[nak^si] (夏)

/uriru/[uriru] (下りる)

/para/[para] (柱)

/para'i tu'i/[paraitüi~baraitüi] (笑う)

/para'ati/[para:ti] (払う)

/pari/[pari] (畑)

/p'iri/[p'iri~b'iri] (坐れ)

/peri/[pɛri] (行け)

/karapa'i/[karapa'i] (灰)

1.2.5 摩擦音素 /f, v, s/

この方言における摩擦音素として /f, v, s/ の三個が認められる。/f, v/ は唇歯摩擦音であり, /s/ は歯茎摩擦音である。/f, v/ は同一調音点において, 有声と無声で対立を示しているのに対し, /s/ はその対立する有声子音を持たない点特徴的である。

例 /Qfa/[ffa] (草)

/Qva/[vva:] (君)

/Qfi/[ffi] (かむ)

/Qvi/[vvi] (売る)

/Qsi/[ssi] (巢)

/Qfi/[f:] (櫛)

/Qsi/[s:] (塵)

/Qfakam/[ffakam] (暗い)

/Qsikam/[ssikam] (白い)

1.2.6 歯茎ふるえ音素 /r/

この方言において, /r/ が語頭にたつことはほとんどみられない。これもこの方言の特徴の一つである。

/'a'iri/[a'iri] (言う)

/'ara/[ara] (糠)

/'arapana/[arapana] (一番, 最初)

/'arami'i/[arami:] (粗い, 粗い目)

/'irapi/[irapi~irabi] (送ぶ)

1.2.7 半母音音素 /j, w/

大神方言の半母音音素には /j, w/ が認められる。/w/ の現われる頻度は, これまでの資料によれば, きわめて小さい。

また, この半母音が他の子音と結合して, 唇音化を起こす現象もほとんど見られない。非常に少数の語例においてしか認められない点もこの方言の特徴の一つである。

例 /'wa'IM/[wa'im] (追いかける)

/'wa'aki/[wa:ki] (上, 上部)

/'wa'a/[wa:] (豚)

/'ja'a/[ja:] (家)

/'ja'asikaM/[ja:sikam] (腹が減る)

/'ja'akime/[ja:kime] (やもり)

/'ja'ara/[ja:ra] (腰, 帯をしめるころ)

/'ju'i/[ju'i] (夜)

/'juka/[juka] (床)

/'juki/[juk^si] (斧, よき)

1.3 モーラ (拍) 音素

この方言では次のようなモーラ音素が認められる。

(1) /Q/[f, v, s]

(2) /ɸ/[ɸ]

(3) /M/[m]

(4) /N/[n]

1.3.1 /Q/について

これまでの資料によれば, [p, t, k] は /Q/ に立つことがない。これが事実であればこれもおそらく大神方言の大きな特徴の一つになるであろう。更に調査する必要がある。

この方言で /Q/ に立ち得るのは, これまでの資料によれば [f, v, s] のみである。摩擦音の [f] [v] [s] は, 語頭, 語中, 語尾において常に [f f -] [- f f -], のように現われる。これは [v] [s] においても同様である。

これらについては, 従来の解釈は成節的音素として扱われることが多かったようである。

事実, これらの子音は, 語頭, 語中, 語尾において, 単独で現われることもある。

しかし, このような場合は, インフォーマントによっては, たいてい [i̯], [y] などの口構えをかすかに残しつつ調音しているようである。

また, これらの音声は, 例えば [k i̯ f t i k a :] <作った>などの場合, 更に次のような形をとることができる。

[k f a t ε :] ~ [k i̯ f a t ε :] <作らない>

[k f i t u] ~ [k i̯ f i t u] <作った>

[k f ε :] ~ [k i̯ f ε :] <作った>

つまり, [f] は成節的音素のように見られたが, それが [f a], [f i], [f ε] のように /c v/ の形で語中に現われてくるということは, 従来, それらが成節的子音として認定されたことの不当性を示すものであろう。成節的子音のように見えたのは, 実は母音が無声化した音声的な形であって, 音韻的には / i, i̯, u / などの母音を補って解釈することが可能なものと思われる。大神方言の /Q/ は実はこの母音の無声化による同化現象の一つであ

るといえる。次に /Q/ の例を示す。

/Qfa/ [ffa] (子供)

/kaQfi/ [kaffi] (かくす)

/maQfa/ [maffa] (枕)

/taQvi/ [tavvi] (たぐる)

/kavvi/ [kavvi] (被る)

/Qva/ [vva] (君)

/Qvi/ [vvi] (売る)

/QsaM/ [ssam] (しらみ)

/Qs i̯ kaM/ [ss i̯ kam] (白い)

/Qsus i̯ / [ssus ~ ssusi̯] (印, しるし)

1.3.2 /M/, /N/, /ɸ/について

大神方言には /ɸ/ と /N/, /M/ の区別が認められる。たとえば

/Nta/ [nta] (どこ)

/N'Nki/ [nnki] (抜きなさい)

/ɸkja ti/ [ɸkja ti] (百足)

/ɸkiM/ [ɸkim] (帰る)

/M'Mku/ [mmkU] (膿)

/Mki/ [mki] (道)

/M'Mki/ [mmki] (いもかずら)

/M'Mta/ [mmta] (実)

/Mta/ [mta] (土, 粘土)

/M'Mna/ [mnna] (みんな)

/Mna'aki/ [mna:ki] (半分)

/Mnaka/ [mnaka] (まん中)

以上の例からもわかるように, /M/, /N/ の後には種々の子音が続き得る。つまり, /M/ /N/ は後続の子音のいかににかかわらず, それだけで一音節を形成する点, /ɸ/ と区別される。/ɸ/ は常に /k/ の直前にたつと記述することができる。

2. 音韻対応

大神方言と国語（奈良時代日本語）の音韻対応を中心として、部分的には首里方言、宮古平良方言などとの音韻対応について略述する。本稿は中間報告であるから、詳細な点について明らかにすることはできない。更に綿密な調査研究が望まれる。

2.1 母音の対応

国語と大神方言の母音の対応関係は次のようになっている。

(国語) i e a o u (c, s のあと) ai ae ao
甲乙

(大神方言) i i a u i ai ai au

例① / i / が上代国語イ段甲類に対応する。

ka k^si ni (垣, 垣根) 「加岐」 (記, 神武)

k^si n (着物, 衣) 「伎奴」 (万, 3453)

k^si k^si m (聞く) 「岐久」 (記, 仁徳)

② / i / が上代国語イ段乙類に対応する。

ki: (木) 「紀」 (万, 五, 812)

ukim (起きる) 「於己 隋 智」 (記, 顯宗謠, 83)

③ / i / が上代国語イ段音に対応する。

is i (石) 「伊斯」 (万, 813), 「伊志」 (万, 4310)

itu (糸) 「伊止」 (歌経標式),
「伊刀」 (万, 4405)

iru (色) 「伊呂」 (万, 850)

ita (板) 「伊多」 (記, 下, 雄略謠, 105)

ikjε (鳥賊)

④ / i / が上代国語エ段音に対応する。

afi (汗)

ami (雨) 「阿米」 (記, 下, 允恭謠, 82)

uti (腕)

pani (羽, 翼) 「波祢」 (万, 3625)

putuki (仏) 「保止乙 氣乙」 (仏足石歌)

tira (寺)

tani (種) 「多祢」 (万, 3761)

ti: (手) 「」 (記, 下, 仁徳謠, 70)

kaki (影) 「加氣乙」 (万, 4469)

kati (風) 「加是」 (万, 4514)

kani (鉄) 「加尼」 (記, 上, 注)

mi: (目) 「米乙」 (記, 上, 謠3, 万, 131)

2.2 子音の対応関係

2.2.1 カ行子音

(国語); カ キ ク ケ コ
甲乙

(大神方言); ka k^si ki fu ki ku

① カ → ka

例 kasa (笠)

kas i (槽)

kakam (鏡) 「加賀美甲」 (記, 下, 允 謠91)

② キ → k^si

k^si k^si m (聞く) 「伎^々都都」 (万, 868)

③ キ → ki

kik i (傷)

ki: (木) 「紀」 (万, 812)

④ ク → fu

fu k^si (口) 「久知」 (記, 中, 神武謠13)

fu k^s (釘)

fumu (雲) 「久毛」 (記, 神武謠21)

fum (汲む)

⑤ ケ → ki

ki i m (蹴る)

kikiri (削る)

⑥コ→ku

kukim (漕ぐ)「許_乙我牟」(万, 4398)

kusi (腰)「許_乙志」(万, 804)

2.2.2 サ行子音

(国語) ; サ, シ, ス, セ, ソ

(大神
方言) ; sa, si, si, fi, su

例①サ→sa

saki (酒)「左気_乙」(万, 852)

satarε: (先に)

sapi (錆)

②シ→si

sikimim (沈む)

sita (舌)

sima (島)「之麻」(万, 3601)

③ス→si

si:si (すす)「酢四手」(万, 2651)

sitim (捨てる。失う)

「須底」(万, 4211)

sim (炭)

④セ→fi

fin (線)

fipakam (狭い)

⑤ソ→su

suri (剃れ)

sutatiru (育てる)

sutikaki (袖かけ)「蘇_甲泥」(万, 3973) 例外

2.2.3 タ行子音

(国語) ; タ チ (ヂ)(ヅ) ツ テ ト

(大神
方言) ; ta k'i k'i k'i ti tu

例①タ→ta

ta: (田)「多」(万, 4455)

takakam (高い)「多可久」(万, 3627)

taki (竹)「多気_乙」(万, 824)

②チ→k'i

k'i: (乳)「知」(万, 4122)

k'i kakam (近い)「知香奚務」

(万, 3851)

③ツ→k'i

k'i kai (使いなさい)「都可比_甲」

(万, 3627)

k'i k'im (包む)「都都美_甲氏」

(万, 4102)

k'i ki (突け)「都久」

(記, 下, 清寧謡 12)

k'i na (綱)「都奈」(万, 3656)

k'i fi (釣る)「都里」(万, 3956)

④→ti

ti: (手)「呂」(万, 904)

tiki (敵)

tira (寺)

timpav (缸)

⑤ト→tu

tu:kam (遠い)「登_乙保久」(万, 3688)

tuk'im (研ぐ)「刀_甲具」(万, 4467)

tukim (浴ける)

tupi (飛べ)「等_甲比可弊流」(万, 876)

tusi (年)「得_乙之」(万, 830)

①チ→ti

tikaitu u'i (違っている)

②ツ→ti

ti(:)ru (弦)

③ジ, ギ; ズ, ゴ→ti

tipan (襦袢)

tin (金)

tu: (尾)

例外の①～③はおそらく首里方言などの破擦音〔tʃ, ts; dʒ, dz〕などに対応するものであろう。これらは国語(奈良時代)の音韻と直接には結びつけられないようである。

2.2.4 ナ行子音

(国語); ナ, ニ, ヌ, ネ, ノ

(大神
方言); na ni nu ni nu
N N

例①ナ→na

nakasa (長さ)「奈我家牟」(万, 4006)

nak^sim (泣く)「奈伎 都都」
(万, 3762)

nam (波)「奈美_甲」(万, 3609)

nata (涙)「那美_甲多」(万, 798)

②ニ→ni, N

ni: (荷)

nim (煮る)

kan (蟹)「迦迹」(記, 中, 応神謡43)

Un (鬼)

③ヌ→nu

nunu (布)

nufukam (暖い)

nuim (塗る)

④ヌ→N

n:ki (抜きなさい)

⑤ネ→ni

pani (羽)「波衾」(万, 3625)

tani (種)「多衾」(万, 3761)

ni: (根)「泥」(記, 中, 神武謡12)

⑥ノ→nu

nutupuni (のど)

numi (飲め)「能_乙弥弓」(万, 821)

nUm (蚤)

nU:ri (乗る)「能_乙里」(万, 4062)

2.2.5 ハ行子音

(国語); ハ, フ, ヘ, ホ

(大神
方言); pa, p^si fu pi pu

例①ハ→pa

pa: (葉)「波」(記, 中, 景行謡32)

pa'i (蠅)

pa'im (這う)

paka'im (計る)

pak'i (脚)

②ヒ→p^si

p^si:ka'im (光る)「比_甲加流」(万, 855)

p^si:ki (ひげ)「比_甲宜」(万, 892)

p^si:k^sim (ひっぱる)「比_甲岐以例」
(紀 極)

p^si:sima (昼間)「比_甲流」(万, 4089)

pi:ta'i (左)

p^si:tu (人)「比_甲登」(万, 744)

③ヘ→pi

pina'im (減る)

pi: (屁)

④フ→fu

fuk^sim (吹く)「布伎_甲多弓受」
(万, 892)

funi (船)「布衾」(万, 875)

futa (蓋)

fuju (冬)「布由」(万, 4003)

furukam (古い)「布流之」(万, 3920)

⑤ホ→pu

putuki (仏)「保止_乙氣_乙」
(仏足石歌)

pu:~pU: (帆)

pusi (星)

pu:~pu: (穂)

m:k^si (六つ)

④メ→mi

mi: (目)「米_乙」(記, 上, 中, 神武謡18, 19)

ami (雨)「阿米_乙」(記, 下, 允恭謡82)

imi (夢)「伊米_乙」(万, 809)

pak'imim (始める)「波自米_乙」
(万, 4137)

2.2.6 マ行子音

(国語); マ, ミ, ム, メ, モ
(甲)

(大神
方言);

(大神
方言); ma, M, mi M, mu mi mu

⑤モ→mu

muk^si m (持つ)「母 多受」
(記, 下, 仁徳謡, 65)

mumi (揉め)「毛美甲」(万, 3880)

muri tu (漏れている)

muru (燃える)「毛甲由流」
(記, 中, 景行謡, 25)

mumuni (腿)「毛甲毛甲那賀」
(記, 上, 謡, 4, 6)

munu (ことば, ものいい)

例①マ→ma

ma:sU (塩)「志本_甲」(記, 下, 仁徳謡75)

mak^si (松)「麻都」(万, 4501)

mak^si m (蒔く)「末_甲枳_甲於保之」
(万, 4113)

matu (窓)

maffa (枕)「麻久良」(万, 809)

②ミ→mi, M

miki (水)「美_甲豆」(万, 4002)

mimiki (蚯蚓)

mi:ru (見る)「美_甲礼婆」(万, 800)

mk (右)

mk^si (道)「美_甲知」(万, 3694)

am (網)「安美_甲」(万, 3917)

mtitu (満ちている)「美_甲都」
(万, 3610)

③ム→mu, M

mura (村)

muki (麦)

muku (婿)

mtapa (六束)

2.2.7 ワ行子音

(国語); ワ, エ, ヲ

(大神
方言); pa pi pu

例①ワ→pa

pakakam (若い)「和可家礼婆」
(万, 905)

pak^si ta (わきの下)「和岐_甲豆紀_乙」
(記, 下, 雄略謡, 105)

pak^si mik (湧き水)

paki:ru (分けなさい)「和枳_甲弓」
(万, 4089)「都由和氣_乙」(万, 4297)

passim (忘れる)「和須良牟」
(万, 4344, 防人歌)

pata (腹)「波良」(記, 下, 仁徳謡61)

pataim (渡る)「和多之」(万, 3907)

②エ→p i

pikitung (男)

pi: tu u'i (酔っている)「恵比甲」
(記, 中, 応神謡 50)

③ヲ→pu

putu (夫)

pu'im (祈る)「乎良自」(万, 3904)
pu: ~ pū: (紐) (麻)「遠」

(記, 上, 謡, 2)

3. 大神方言における音韻同化の現象

大神方言には種々の音韻同化現象が見られるが、これらをまとめて法則化すれば、次のように記述することができる。

I, inter-vocalic な [r] の同化現象

II, その他の音韻同化現象

3.1 inter-vocalic な [r] の同化現象
について法則(1) $C_1V_1-r-V_2 > C_2C_2V_2$ において C_1 =無声子音ならば C_2 =無声子音…① C_1 =有声子音ならば C_2 =有声子音…②

ただし, ①②の V = 狭母音

例①

maffa (枕), makura > maffa

ffakam (暗い), kura > ffa~

ffu (黒), kuro > ffu

ffu (降る), furu > ffu

fi:m (くれる), kure ~ > ffi ~ > fi: ~

mussu (筵), musiro > mussu

ssam (しらみ), sirami > ssam

ssikam (白い), siro ~ > ssu ~ > ssi ~

passa (柱), pasira > passa

pass'im (忘れる), wasure ~ > basure ~ > pass'im

例②

avva (油), abura > avva

avvi (炙る), aburi > avvi

kavvi (被る), kaburi > kavvi

vva (君), ura > vva

vvi (売る), uri > vvi

tavvi (たぐる), taguri > tavvi

この方言で $g > v$ の音韻変化が起こるということは, $k > f$ の音韻変化を考慮にいれないと理解が困難になり, はなはだ奇異に感じられるであろう。

先にカ行子音の音韻対応の項でも述べておいたが, $o \rightarrow u$, $e \rightarrow i$ の母音変化が起きたために u は子音 k を唇歯音化させて, オ段とウ段の対立を守った。この変化は実に体系的に行なわれているから, 従って,

 $k; f = g; x$

の構造式におきかえて考えることができる。つまりカ行子音の一部が変化すれば体系の均衡を保つために他のガ行子音の一部にも類推変化が及ぶものと考えることができる。

ところで, 先に, この方言では有声と無声の対立が失われつつあるとも記述した。もし完全にその対立が失われているのであれば, tavvi (たぐる) のような同化現象は起こらなかったであろう。カ行子音がイ段においてのみ, $k'i$ と $k'i'$ の最小対立を示したこと, $k \rightarrow f$, $g \rightarrow v$ の体系変化の存在が相照応している事実は, 有声と無声の対立が完全に失われていないことを示すものであり, 誠に興味深いことでもある。

大神方言の有声子音は半有声子音となり, さらに進んで無声子音化している。学者の中には, この現象をさして注意するとともに, 「大神

方言には有声と無声の区別が全くない。」とする人もあるが、もしそうだとすれば、上の $g \rightarrow v$ という音韻変化の説明は不可能である。有声音がなければ、これらは $k \rightarrow f$ と等しく変化したはずであるのに、実際には $g \rightarrow v$ の変化を示しているのである。

3.2 その他の音韻同化現象

inter-vocalic な $[r]$ の同化現象のほかに、この方言に見られる同化現象は *progressive assimilation* (進行同化) である。進行同化のそれぞれは無声子音に挟まれた母音が無声化して脱落することから始まるものとみられる。従って、これらの同化現象はすべて、母音変化(三母音化)の終了した後に起きたものとしなければ、その説明はむづかしい。

3.2.1 進行同化

言語の線状性を考慮に入れて、左か右へと同化現象が進むことを進行同化と呼ぶとすれば、大神方言には次のような進行同化の例が認められる。

ffa (草); $kusa > fusa > ffa$
 ffakam (くさい); $kusa \sim > fusa \sim > ffa \sim$
 ffu (糞); $kuso > fusu > ffu$
 ffu: (薬); $kusu \sim > fusu \sim > ffu:$
 ff (櫛); $kusi > fusi > ff$

3.2.2 逆行同化

進行同化と全く逆の方向に進む同化現象を逆行同化と呼ぶとすれば、琉球方言の音韻現象の中にはこれらの例も多く見られる。

これまでの資料によれば、大神方言には逆行同化の例は認められないが、たとえば八重山鳩間方言などにはそれが認められる。

inter-vocalic な $[r]$ の同化現象は、いわば進行同化であるから、大神方言の同化現象は二つながら進行同化であるのに対し、八重山鳩間方言などは、進行同化と逆行同化が並存する同化現象の型と言えよう。

鳩間方言には宮古方言と共通する音韻現象が多く認められるので、参考までに例を示しておく。

① 逆行同化の例

ssa (草), $kusa > fusa > ssa$
 ssu (糞), $kuso > fusu > ssu$

(註) 奈良時代日本語に関する資料は、主として「上代仮名遣辞典」(金田一京助監修)によった。

また、大神方言の資料については琉球大学沖縄文化研究所編「宮古諸島学術調査報告—言語文学編」も参考にした。

4. 資 料

a: 粟
 a:kU 歌, あやご
 aipipī 泡
 ai ある
 aiṁ, airi 言う。
 aitu(z)i 喧嘩している。
 ai'tuī //
 aUna 喧嘩するな。
 ai 喧嘩しなさい。
 auyysikam 喧嘩したい。
 aiki: 歩く。
 mk'i U tu aiki:i 道を歩いている。
 ai'ati 歌う。
 a:kU: ai'ati うたをうたう。
 a'ate:n 歌わない。
 airitu 歌った。
 ai'ate:n 歌わない。
 aikim 歩く。
 airi 言う。
 munu airi ものを言う。
 ai'ate:n 言わない。
 a'rimi:ru 言ってごらん。言え。
 a'ripa: taUkata: munu Utu
 言えば よかった のに。
 aUkī 扇
 aUmiffane:m p'iitu 臆病でない人。
 aumi p'iitu 臆病な人。
 aUkam 青い。
 aka: aka: 赤い。
 pana: akakam 花は赤い。
 akakam 赤い。
 aka'i 東
 ii 西, nisi 北, pai 南

aka'i nu kata 東の方
 akakani 銅
 akak'i 血
 akari tu ui 明かるい。
 akagka 赤ん坊。
 akirU 上げる。
 akite:n 上げない。
 akitu 上げたい。
 aki 味。
 ak'i kam 暑い。
 ki:ja ak'i kam 今日は暑い。
 ak'isa 熱い。
 ak'i kam 熱い。
 unu tsa:ja ak'i kam この茶は熱い。
 ak'imakam 甘い。
 unu sata: ak'imakam
 この砂糖は甘い。
 ak'imim 集める。
 akim 開ける。
 asakam 浅い。
 imma: asakam 海は浅い。
 asasa 浅いよ(浅いと思う)。
 afi 汗
 afi:ti ~ する。
 asamati ~ なさる。
 affe:ra mati ~ やってください。
 afi ffi: samati ~ やってください。
 i'a: uri: affe:ramati
 お父さんこれをやってください。
 as'ipim 遊ぶ。
 asite:n 止む。 やらない。
 si:kama Upa: asite:n 仕事をやらない。
 as'ipi 遊び。